

## 粉からの粘土遊びの実践報告

### —身体的活動と言葉かけに着目して—

浅野秀男

足立倫子

(東海学院大学短期大学部 講師) (中濃保育園 講師)

#### 要 約

幼児の素材や形や色といった「原初的体験」と、主体的な発見を目的にして、粉状の粘土と水の関係を体全体で体験し、出来上がった粘土の状態から、それぞれの違ったイメージを喚起し造形した研究授業。まずは授業の参考事例として、海外の実践例と理論を紹介した。実際の授業報告としては、保育者の言葉かけと幼児たちの言葉を記録し、それぞれの場面の言葉を手懸りにして、幼児たちの感情や思考を考察した。

キーワード：原初的体験、粉粘土、水、素材の刺激、言葉かけ、環境

#### 研究授業の動機・目的

戦後の美術は、多様な言葉と作品を生み出してきた。大衆文化から生まれたポップアートやアクションペインティング、思想的なコンセプショナルアート、場や状況を意識したインスタレーション、演劇的行為の表現としてのハプニング等。また近年では、映像機器やコンピューターの発達によるアニメーションやCG映像なども多く見られ、もっとも近いところでは、プロジェクターマッピングやディズニーランドを始めとするテーマパークも美術と言っていいだろう。こうした多様な美術が、美術館のみならず、いろいろな場所で多くの人々に視覚的な刺激を与え、感動を与えている。また、一方で歴史的、伝統的な美術にも関心が集まっている。伊藤若冲や阿修羅像などの展覧会や、近代建築の世界遺産登録などがそうしたことを示している。当然子ども達もそうしたものにどこかで触れている。

美術教育にも、そうした作品や流れは影響を与え、取り入れられている。モダンテクニック(アクションペインティング)や小学校課程の「造形あそび」(インスタレーション)にも影響を与えている。幼稚園などでもすでに

コンピューターを使ったお絵かきを取り入れられている。また、墨絵や和紙といった伝統的なものや、新しく開発された素材で、多様な教材研究が行われている。

幼児造形の授業も、子どもたちの体験も含めて、いろいろな形で現代の美術が影響を与え、教材研究にいろいろな発想が生まれている。そうした教材研究は歓迎すべきことではあるが、幼稚園、保育園へ訪問した時に展示されている作品を見ると、現在の保育現場の造形活動が、はたして幼児の主体的な感性や思考を培っているかといえ、必ずしも肯けないよう思われる。多くの作品が、保育者から与えられた視覚的な刺激に対して、予想できる作品になっている。所謂、予定調和の作品になっていると思われる。保育の現状を考えると、そうした造形活動もありうるであろうし、否定するものではないが、子どもたちに、より原初的体験(筆者)の刺激の中から、より主体的で感覚的な発見ができる教材や授業が必要ではないかと考えている。

一般に幼児の粘土工作は、紙粘土、油粘土、土粘土が多いだろうが、それぞれが粘土として出来上がったもの

を使っている。今回の授業は粘土になる前の、粉状のものを子供たちに体験してもらった。精製された土は、サラサラと柔らかく、時に子どもたちはその柔らかさや軽さを「しあわせ」と感じていた。ただ粉粘土はそのサラサラとした質感のため形には成り難く、床に広がっていく。その後、広がった粉粘土を集めて水を混ぜていくと、あれほど柔らかく軽かった土が、ねばねばと子供たちの手や足に纏わりつき、重さが増すとともに形になっていく。水の混ぜ方により、子どもたちの粘土は、まったく違った状態になり、その状態から子どもたちはそれぞれの感じた形を作っていった。その形は、出来上がった粘土からの形とは全く違ったものであった。詳細な授業展開はのちに述べることにする。

筆者は柔らかさ、硬さ、軽さ、重さ、明るさ、暗さ等の体験を「原初的体験」と呼んでいる。保育者は子どもたちが「原初的体験」ができる状況を用意し、表現できるような準備や、支援が大切だと考えている。幼児造形は、「原初的体験」を各々の子どもたちが感じ、主体的に造形表現をすることが、子どもたちの「造形思考」「造形感覚」を培うことになると考えている。

敢えて言えば、作品として残らなくてもいい。子供たちが、物質（色、形、質感）や空間や状況（環境）から何かを感じることが重要であろう。保育活動として各地で行われている「森のようちえん」や、「田んぼ保育」なども、造形活動として捉えられる。森では、子どもたちはいろいろな形や色の葉っぱを発見し、何かを感じて



(図1) 森のようちえん



(図2) 田んぼ保育

いる。田んぼでは水の質感を感じ、抜けない足で重力を感じている。そこに「原初的体験」があると言える。

次に子どもたちの原初的体験と、主体的な表現として、今回の授業実践に共通する体験事例として、イタリアの幼児教育のレッジョ・エミリアの実践を述べておく。世界的な評価の高いレッジョ・エミリアであり、保育全体としては比較のしようもないのだが、子どもたちが感じ、表現するという点において、今回の授業実践との共通項もあると考えている。

### レッジョ・エミリアの幼児教育実践

レッジョ・エミリアの幼児教育は、1970年代からヨーロッパ諸国に広まり、1980年代から90年代にかけてアメリカからアジア諸国に紹介され、世界的に高い評価を受けている。書籍も多く出版され、日本でもそうした実践の展覧会が、2001年に開催された。エミリアの幼児教育の最大の特徴は「アートの創造的経験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出す」<sup>(註1)</sup> ことであり、多彩なプログラムと広がりを持っている。ここではレッジョ・エミリアの幼児教育全体の紹介は省略するが、今回の研究授業との共通する実践を簡単にあげておこう。

### 場所との対話

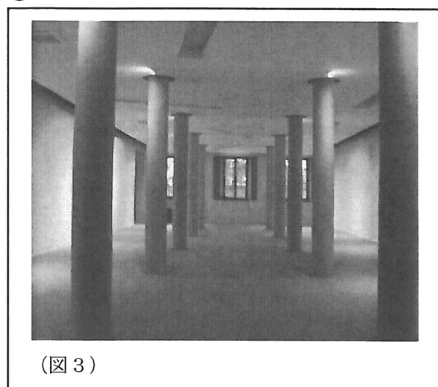
- ① 「子どもたちが最も興味を示したものの一つは、円柱のホールと呼ぶ場所でした」<sup>(註2)</sup>
- ② 「子どもたちがセンターを動きまわり空間を解釈しマッピングするときは、走ることと、声はどちらも、子どもたちとともにあります」<sup>(註3)</sup>
- ③ 「見えることと見えないこと。  
走ることをつかまえるのは不可能」<sup>(註4)</sup>
- ④ 子どもたちによって、いろいろな言葉が生み出され、色々な実験がされる。
- ⑤ 「白い円柱たちは素敵なんだけど、似すぎている。どの一つだって、ある一つの円柱なんだ、わかるようにしなきゃ。(アレクサンドロ)」<sup>(註5)</sup>  
子どもたちは、円柱に個々を認め、個々がわかるようにしようとする。円柱を変容し表現の起点になっている。
- ⑥ 「この融合からわき出るアイデアは、想像と可能性

を創造的に組み合わせる、勇敢でユーモラスなものに見えます」(註6)

⑦ その後子どもたちは、円柱をいろいろな素材で立体的につくり、空間で並べて組織化する。また、コンピューターをつかって、現実と虚構の環境をつくりだす。

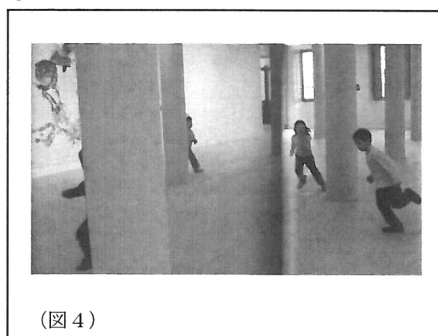
この「場所との対話」のプログラムはさらに展開していくのだが、今回の研究授業との共通項は⑥までである。その後は、残念ながら日本の多くの保育園、幼稚園では困難であろう。

①



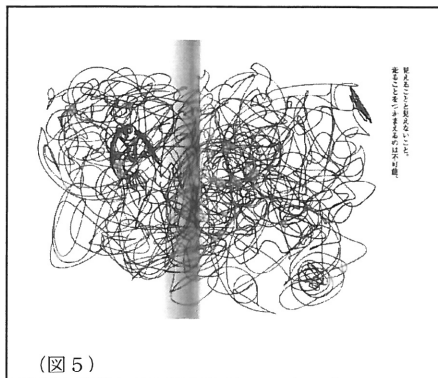
(図3)

②



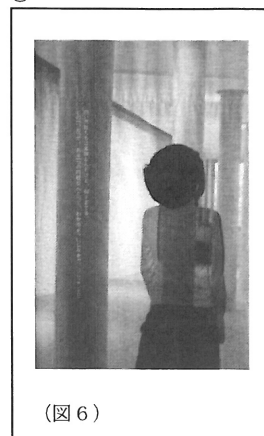
(図4)

③



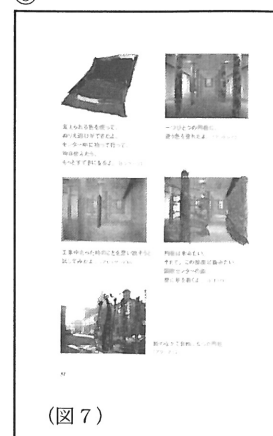
(図5)

⑤



(図6)

⑥



(図7)

レッジョ・エミリアの子どもたちは、円柱の空間を走り回り、そこから何かを感じ、考え、解釈して、個々がそれぞれの形にして表現する。今回の粉からの粘土遊びの中でも、同様のようすが見られた。粉粘土と水の配合は、各自が理解したものであり、そこからは全く違う状況が生まれた。そこから、個々が違う発見や理解をしてそれぞれの造形表現が生まれた。特に子どもたちが時々発する言葉は新鮮であった。次に今回の研究授業における環境と視覚について参考になる理論を述べてみよう。

### 環境と視覚

ここでいう環境とは、周りのすべての物質を指している。今回の授業でいえば粉粘土や水も環境である。環境と視覚については、物づくり(アート)や保育造形において有用だと思えるアフォーダンス理論を引用しておく。アフォーダンス理論は、ジェームス・ギブソンというアメリカの知覚心理学者によって、1960年代に完成されたものである。

「アフォーダンスとは、環境が動物に提供する価値のことである。」(註7)「アフォーダンスは事物の物理的な性質ではない。それは動物にとっての環境の性質である。アフォーダンスは知覚者の主観が構成するものでもない。それは環境の中に実在する、知覚者にとって価値のある情報である」(註8)

視覚は、固定した網膜に映るものだけでなく、刻々変化する環境から価値や情報を得て、包括的に知覚しているということであろうか。レッジョ・エミリアの子ど

## 粉からの粘土遊びの実践報告

もたちが円柱を走り回り感じる何かは、アフォーダンス理論によれば環境からの情報ということになる。また、今回の授業に当てはめれば、粉から粘土へ変化する環境から、子どもたちは変化の情報を得て、知覚を拡大していくといえる。日本でのアフォーダンスの研究者である佐々木正人氏は、アートとアフォーダンス（レイアウトの法則）アフォーダンスと保育（アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察）との関係を多く著している。今後の研究対象としておこう。

（文責 浅野秀男）

## 授業報告・言葉かけに着目して

保育においては、言葉かけは欠かすことのできない支援である。子どもの言葉にならない表現を汲み取ったり、共感や賞賛の言葉かけをすることで、子どもは安心し自信を持つようになる。また、言葉のやり取りでイメージが明確になり、保育者と体験を共有することができる。このような言葉かけの効果は、造形あそびにおいても、子どもの活動をさらに活発にする効果あるのではないかと考える。

ここからは子どもの活動、子どもの言葉とともに、保育者の言葉かけの記録を、授業展開にそって報告をする。その後4場面の保育者の言葉かけを考察する。

## 授業概要

授業タイトル	粉粘土からの粘土遊び	参加人数	幼児(年長) 50名 保育者6名
授業のねらいとイメージ	粉粘土と水を混ぜることでの、粘土への質感の変化を体感する。各自の状況から形をイメージする。	環境構成	保育園の隣地の公園を使い、屋外にブルーシートによる場を設定した。センターに粉粘土、周囲にベビーバス(5個)に水を準備した。
準備したもの	ブルーシート(5)、ベビーバス(5)、洗面器(35)、プリンカップ(50)、粘土へら、粉粘土(20kg)、タオル		

## 授業の記録

	子どもの活動	子どもの言葉	保育者の言葉かけ
01	粉土を手やスコップで集めて、それぞれのグループの場所に集めて、山を作ろうとしている。	先生、トーフみたい。 わー、ふわふわ。きゃー、わー。 先生、真っ白ー。  なめらか。  トーフの手になっちゃった。 トーフみたいで気持ちいい。	さらさらやねー。何になるかな。  ほんと真っ白。 足も真っ白。 うん、さらさら。 さらさら？つるつる？なめらかかぁ。 気持ちいい？気持ちいいね。 おー、スコップ持ってきたの？白いね、わー真っ白。 トーフの手になっちゃった。 どーお？土のお山出来てる？お、いい感じですねー。
02	粉粘土のサラサラの感触に驚いたり楽しんだり、しながら、山を作っている。保育者に共感を求めて粉を触らせ	こんなん。 見て。手が。 足が真っ白。だんだん、これ小っちゃくな って。 おもちみたい。 ちょっと、スベスベする。こんなん。	さあ、お山はどうですか？ うん、こんな感じ？ うん、まっしろけ。 がんばれ頑張れ。よーし、お山を作るぞ。 さらさらやねー。

	ている。	めっちゃ、ちっちゃい。  泳ぎたい、ここで。 ぼくさ、生き物入っていることにしちゃった。	どれどれ、あ、すーごい。ほんとだー。 なめらかっていったのが、分かるわ。 こちらのグループさん、お山どうですかあ？ お山出来てきているよ。  いいよ。 おおー。
03	粉粘土の感触から連想する様々な気持ち話を話している。	めっちゃフワフワ。 幸せだあ。 気持ちいい。 ハワイみたい。 うんとね、ここの中に入りたい。 ここの、爪の中に。  なんか日焼けしてないって思ってまう。 ここでね、ここの中に入りたい。 ねー、爪。	ふわふわ？うんうん。 フワフワやねえ。 幸せ、いいねえ。 気持ちいいの。 あははは。  うん、あ、ほんとや。お手で白くなったね。全身白いよ。  あははは。 あらま。よーし、お山つくるぞー。
04	広がる粉砂を手でかき集めている	もうなくなってきた。 なくなってきたかもよ。	さあ、お山はどうですか、こちらは。 なくなってきた？ 高くなってきたかなあ。
05	粉粘土集めが終わりに近づき、子どもはお互いの様子の変化に気づきだす。	幽霊みたいになっちゃったよう。  僕の顔、どうなってる？ あー、ゆか先生が真っ白。  ねえねえ、真っ白。 足の跡。  僕めちやくちや真っ白。だってねえ、コケたから。  水いれるやつは？ 水入れてもいいんやって。俺もやる。洗面器の中、入れてもいいんやって。	この辺、まだいっぱいあるよ、ほら。 ほんとやー、真っ白けっけ。  僕の顔ねー、白くなってる。 ほんとやー、ゆか先生も白くなってきた。 いっしょやねー。真っ白やー。 足跡つくねー。  転んじゃったの？ うん、真っ白。いっしょやね。 作れる？ソウマ君。  おータライで持って行くの？ 考えたね。 あ、バケツ持ってきた、バケツ。  洗面器の中に入れてもいいんだって。

粉からの粘土遊びの実践報告

			ああ、目が痛い？
06	山にした粉粘土に 来たアリを気にし つつ、最後に山をさ らに大きくしよ うとする。	(アリをつまんで) これは？  アリさん白くなっちゃった。 さっきさー、アリがここについて落ち た。  ゆか先生の足がきになったんじゃない？  まだー。なってきた。 かけるよー。ドバドバ。いっぱい来た。  ほいほい、ほいほい。	どうしようねえ、それ。  アリさん白くなっちゃたか。  そっかー、アリさんも一緒に造形遊びをしとるわ。 そうかもしれん。 どうですか、お山になってきた？  いっぱい来たね、ほんとだー。  スコップ二刀流。 ほいほい、ほいほい。
07	集めた粉粘土を、両 手で撫でたり押さ えたりして形を整 えている。	下からやるよ。 さあー。 こうやって平に。  いっぱいできた。	あ、いいねえ。お山になってきたよ。
08	足で粉粘土を押さ えている子がいる。		どうですか？ 足跡つけてるの？
09	山頂に穴を開けて、 バケツで水を注ぐ。 形が崩れたり泥に なったりして、山の 形が急激に変わる ようすを楽しむ。	穴をやる。  もうこれ以上やったら、レジャーシートや って、これ以上掘ったら。(底まで到達し てしまう) そうしたら、水入れるの。  これは、マグマだつてば。 この周りが壊れてきた。じゃあ、僕はでっ かいのをやる。 きゃー。川になった。あー。 変なお山。あははは。きゃー。	ほんとや、穴あいたね。  あ、そうかー。  そうかー。  どうなるかな。 どうかな どうかな。  あー、川になった。

			おおー。
10	水と粉粘土を手で混ぜ始める。手の感触に、叫び混じりの興奮した様子になる。	<p>すごーい、コーヒーみたい。</p> <p>わ、滑る。</p> <p>混ぜて。冷たい 冷たい。</p> <p>あー、ドーロー。</p> <p>手がー、手がー。手がチョコみたい。</p> <p>ちょーっと、手袋みたい。</p> <p>固まる。</p> <p>何か、お菓子みたい。</p> <p>もうちょっと入れて。</p> <p>やべー、やべー。</p>	<p>あらー</p> <p>コーヒーみたいになった？</p> <p>混ぜて 混ぜて、混ぜ混ぜしていいんやと。</p> <p>混ぜて 混ぜて。</p> <p>チョコみたい。</p> <p>ね。お水入るとどうなるんやろう。</p> <p>お菓子みたい。</p>
11	粘土の形の変化のさらに細かいとこ	<p>手ぶくろみたい。</p> <p>手ぶくろあつつい。手がー。</p>	<p>向こうの方の水を集めよう。</p> <p>手ぶくろになった？。</p>
	ろや、少し気持ち悪い感触にも気づく。上手な混ぜ方を仲間と話したりする。	<p>こうやって混ぜたほうがいいよ。</p> <p>わー、なんか変な玉がいっぱいいつてる。</p> <p>玉がある。</p> <p>これ、いっぱい付くでいややー。</p>	<p>手がー。 手、どうなった？</p> <p>わー、すごい。</p> <p>手袋ー。</p> <p>いっぱいあるの？何これ？</p> <p>玉がある？</p>
12	水を付け足しながら、腕と体を使って、粘土をこねている。(グループA)	<p>こねこね。</p> <p>もうちょっと、水を。いい？</p> <p>水をいっぱいって言ったやん。</p> <p>恐竜おぼけが出来るよ。</p>	<p>こねこねー。</p> <p>え！</p>
13	水を付け足しながら、腕と体を使って、粘土をこねている。(グループB)	<p>固まる。</p>	<p>どうですか、触り心地は？</p> <p>固まる？</p>

粉からの粘土遊びの実践報告

14	粘土から、だんごやハンバーグを作ったり、山を作ろうとする。	<p>うわー。</p> <p>ねえ、もう固まってる。</p> <p>もう、顔にもついたかも。</p> <p>ねえ見て、顔にもついた。</p> <p>ねえ、何これ。</p> <p>気持ちいい。</p> <p>ねえ、おだんご作ろう。</p> <p>ほら、もう作れた。</p> <p>おもち。</p> <p>これ、ハンバーグ</p> <p>お山、お山作ってる。進撃の巨人みたい。</p> <p>大丈夫、みんなで作りば。</p>	<p>良いね、ユズくん、いい感じにこねとるよ。</p> <p>わー、どうなるかなー、水入れるとどうなるかなー。</p> <p>固まった？</p> <p>ひゃー。</p> <p>わあ。大丈夫、後できれいにしよ。</p> <p>おお、すごいねー。</p> <p>触り心地はどうですか？</p> <p>気持ちいい？</p> <p>おだんご作れるかなあ。</p> <p>あははは、早ーい。</p> <p>おもちー。</p> <p>ほんとやー、ハンバーグ完成やね。</p>
15	水の追加で、柔らかい泥状になっていくグループもある。泥で足を滑らせながら、混ぜている。	<p>うん、固まった。</p>	<p>おおー。固まった？</p> <p>集めて、集めて。</p>
16	お互いの泥だらけの手足を見合って面白がっている。水気が多い泥のグループと、粘土状の固さのグループがある。各グループの仲間で声をかけ合い、泥の山を作っている。	<p>わー、くそー。</p> <p>できる、できる。絶対できる。</p> <p>ここを、ぺっちゃんこにして。</p> <p>ここだけは。</p> <p>お山、お山、これでいいかな。</p> <p>ひゃー。わー。汚れたぜー。</p> <p>こんなになっちゃった。</p> <p>乾かせば大丈夫なんだよ。</p> <p>どろどろのお山なら。</p> <p>手がこんなふうになった。</p>	<p>すごいね、固まってきたね。</p> <p>すごいねー、固まってきたねえ。</p> <p>こちらのグループは、どうですか？</p> <p>こんなになっちゃった？</p> <p>そうやねえ。また、お山できるかなあ。</p> <p>あははは</p> <p>あっちやー。</p>
17	泥の山に手を滑らせている。	<p>かゆい。</p> <p>富士山滑る。</p>	<p>どうなりましたか？</p>
18	形を作ったり、壊したりしている。	<p>泥のあなにー。</p> <p>あー、ぎゃー。</p>	



19	泥の山の上を何度も手を滑らせて遊んでいる。	(黙っているが、気持ち良さそうな顔をしている。)	
20	泥の塊を形に見立てる子どもがいる。	ねーばー。 ねーバッジ。バイキンマンドリル。	何つくったの？
21	脚を作った山の上で滑らせたり、手で泥を塗って遊んでいる。	富士山。 やまびこ村。  ここ、塗るの。 日焼けみたい。	何ができたの？ 富士山？ いいね。村つくったの、みんなで。 脚で、いいね。ぶるぶるぶる。 脚に塗るの？
22	山の上に粘土の塊を乗せて、ケーキを作った。	ミカンを乗せよう。 小っちゃいミカン。 あ、作りたーい。	いいねえ。
23	泥の上にお尻をつけてすわり、形を作っている。	見てー。固まった。 ばんそうこう。	
24	プリンカップを使う。	土入れてさ、プリンみたいにさ。 山作って最後にプリンみたいに乘せて、こうやってさ。 外れればいいんだけど。 じゃあさ、山作ってさ、最後にプリンを作ればさ。	うん。なるかなあ。 どうなるでしょうか。  外れるかなあ。
25	葉を使う。	ゆか先生。  ミッキー。 ねえ、葉っぱ面白い。 葉っぱ飾り付けていい？ どろんこになって、泥まみれやよ。	泥だんご作ったの？なにー。 あらー。何作ったの？ ミッキー、かわいい。 あ、ほんと。 葉っぱもいいんじゃない？どこにする？
26	洗面器の中に泥粘土を入れている。	見てー。 ねえ、みんな、アイス作ろう。	
27	カップの型から粘土を出して並べている。	取れた。	ならんどるね。 今度は何を作ろうかな。何の音した？
28	泥の上に、棒で絵をかいている。	顔かいとるの。 これ、でかい顔。雪だるまかーこお。 やめてよ。	今何しとるの？これは。 あ、顔かくの？

## 粉からの粘土遊びの実践報告

		自分だって壊したくせに。	
29	大きな泥おにぎりを作って落としたり、泥の海で滑ったり泳いだりする。	(大きな粘土の塊を地面に落とす。) (保育士と目を合わせ、笑顔になり、さらに泥水の上を滑って遊ぶ。)	転んだー。つるつと滑るもんねえ。 バーン。大きくなったねえ。 つるつるつるつるー。
30	お城を壊してプリンカップに泥を詰めている。	お城ー。	お城、いーねー。
31	泥で作った、デザートを保育者に見せて、食べるまねをする。	いただきまーす。	

### 発話と考察

#### (1) 粉粘土に初めて触れる ( 01 ~ 08 )

大量に山になっている粉粘土のサラサラの感触に驚いたり楽しんだりしながら、自分達の場所に運ぼうとしている。子どもは、初めて触る粉粘土の心地よい感覚に、歓声をあげて両腕両脚を真っ白くしながら、自分なりに知っている言葉で保育者に伝えようとしていた。「気持ちいい」ことが「ハワイみたい」につながる面白い発想が出た。保育者は、子どもの言葉に「繰り返し」で共感したり、「いいねえ」と賞賛して子どもの面白い発想に興味を持って優しく受け止めて、話しやすい雰囲気を作っていた。

#### (2) 水を加えて遊ぶ ( 09 ~ 13 )

集めた粉粘土の山頂に、穴を開けたところにバケツで水を注いで、山の形が崩れて泥状になる等、粉粘土の質感が大きく変わる場面である。子どもが水を最初に投入する時、保育者は「どうなるかな。」と子どもの気持ちを代弁しつつ周囲の仲間にも注目させて、子ども自身の発見がなされるように言葉かけをしていた。

水と粉粘土を手で混ぜ始めると、サラサラの感触が急に粘り気を帯びてきて、手にくっつき始める。子どもは手の感触に叫び混じりの興奮した様子になった。保育者が、「お水入れるとどうなるんやろう」と、水の追加を間接的に誘う言葉かけをすると、子どもは近くに溜まっ

た水に気が付き手足でかき集め始めた。周囲の子どもも仲間に加わって、「やべー」といいながら、柔らかい泥状に変化していく過程に夢中になった。

#### (3) 粘土を固めて、好きな形に見立てる。

##### ( 14 ~ 23 )

グループによっては水の加減の違いにより、どろどろ感が違ったようになっている。粘り気を持った粘土になり始めると、子どもは、それぞれ形のあるものを作り始めた。腰を落として力強く押すように混ぜる子どももいれば、下からすくい上げるようにゆっくりと混ぜる子どももいる。指の間に入った粘土を剥がしたり、各々のやり方で粘土をこねる感触と関わっている。

保育者は、「顔にまでも泥が跳ねている。」と話す子どもには、「わあ。」と一度受け止めてから、「大丈夫、後できれいにしよ。」と答え安心させた。子どもが「ねえ、おだんご作ろう。」と周りに聞こえるようにつぶやくと、保育者が「おだんご作れるかなあ。」と聞き返すように復唱した。子どもはおだんごやハンバーグなど、保育者に見せながら次々と作り、周りの子どもも作り始めた。さらに足で粘土の上を滑ったりする子どももいて、保育者は笑顔で子どもを見守った。粘土が適度な硬さになると、仲間と協力して大きな山やお城も生まれてきた。

#### (4) 道具も加えて遊ぶ。( 24 ~ 31 )

プリンカップや近くの木の棒、葉なども使って自由に

粘土で遊ぶ。

グループの仲間と全身泥まみれになって地面に座り込んで、アイスクリームやケーキを作っていた。柔らかい粘土をカップに詰めたり出したりすること自体に夢中になっているようである。泥の上を滑るように歩く子どもには、保育者は動きに合わせて「つるつるー」と声をかけた。粘土は思うような形にはならないが、子どもの笑顔は絶えない。近くの仲間と何度も同じ事を繰り返して遊んでいる。

(文責 足立倫子)

(註7)(註8) 佐々木正人著、(1994年)、『アフォーダンスー新しい認知の理論』、p60、p61

## 図版

(図1) 個人提供

(図2)

<http://www.city.katsuyama.fukui.jp/blog1/wp-content/uploads/2013/10/25.9.30%E3%81%A9%E3%82%8D%E3%82%93%E3%81%93%E9%81%8A%E3%81%B3-039.jpg>

(図3)～(図7) 佐藤 学監修、ワタリウム美術館編、(2011年)、『驚くべき学びの世界』、p39、(p42～p43)、(p44～p45)、p55、p57

## 終わりに

今回の研究授業では、子どもたちは屋外という空間で解放され、素材や素材の変化を、体全体を使って十分に体感したと思える。それぞれの子どもたちが、自分の意思で動き、感じ、考え、感覚を働かせて、周りの仲間たちとコミュニケーションをとりながら、主体的な表現ができた。

こうした造形遊びは、準備や授業後の片づけ等に、多くの労力がある。保育園、幼稚園の日常の中で行うのは、かなり困難が伴う。年間計画の中で、季節や子どもたちの状況を見ながら計画することが望ましい。また、新しい教材を試みるという意味では、養成校の教員との協力や連携があってもいいと思っている。共に内容を考え、子どもたちの成長に寄与できることを願っている。

今回のプロトコルデータは、1人の先生にお願いして、ビデオカメラを持ちながら、子どもたちの会話や保育者の言葉がけを録音した。子どもたちの気持ちを受け止め、適切な言葉や接し方をして頂いたと思っている。また、授業以外にも園長先生を始めとして、多くの先生方にご協力を頂いた。末尾ながら感謝を述べておきたい。

(文責 浅野秀男)

## 註

(註1)～(註6) 佐藤 学監修、ワタリウム美術館編、(2011年)、『驚くべき学びの世界』、p8、p38、p42、p44、p55、p56